明治大学教養論集　通巻466号
(2011・3) pp. 77-98

「掟」を破る：自然の秩序と人為的秩序の狭間で

――『新エロイーズ』におけるサン＝プルーの例外性――

折　方　のぞみ

序

ジャン＝ジャック・ルソー（1712-1778）は，人間（男性）の普遍的な政治的権利を理論的に根拠づけたひとりとして，しばしば認識される思想家である[1]。政治思想や教育思想の分野においては，人為的不平等の起源を探り，当時の社会のあり方に鋭い批判の眼を向けた『人間不平等起源論』(1755)，主権者の「一般意志 volonté générale」をキーワードに，ありうべき社会の思考実験的創設と，それが抱えることになるであろう様々な問題を描いた『社会契約論』(1762)，そして，いまある社会の中で，「自然の意志」を妨げない形で人間を育てるという独自の人間形成論の思考実験の書である『エミール』(1762) などが，その代表的作品としてよく知られている。他方，ルソーは同時に，18 世紀の大ベストセラーとなった長編恋愛小説『新エロイーズ』(1761) の作者としても有名である。ほぼ同時期に刊行された『エミール』がパリとジュネーヴで，『社会契約論』がジュネーヴでそれぞれ焚書となった問題作であるのに比べ，『新エロイーズ』はその出版後 80 を超える版を重ねる大成功をおさめた作品であり[2]，ナポレオン・ボナパルトの愛読書のひとつでもあったという[3]。作品の前半部である第一部から第三部までは，貴

族の娘ジュリ・デタンジュ（Julie d'Étange）と平民の家庭教師との間の若き日の無邪気な身分違いの恋愛と，その苦難から別離までが描かれる。後半部の第四部から第六部の舞台は数年後となっている。恋人との別離ののち，ジュリは父親の命の恩人で二回り年長のロシア出身の男性ド・ヴォルマール氏（M. de Wolmar）と結婚して二人の息子をもうけ，妻，母，そして一家の女主人となっている。世界をめぐる旅をして精神的成長を遂げた後にスイスに戻って来た元恋人を，ド・ヴォルマール夫妻が自ら統治する家族共同体（クララン共同体）に手厚く迎え入れるという，いささか倒錯的な状況設定のもとで物語後半部は展開する。お互いに見つめ合うだけの閉じた世界で，ジュリと元家庭教師がその往復書簡の中でデュエットのように愛を歌い合っていた前半部とは対照的に，後半部においては，ジュリと元恋人の間で書簡が交わされることは物語の最終段階である第六部半ばまで全くない[4]。前半部では，身分違いの恋愛と人間の自然的平等という観点から物語が展開していたが，後半部では，厳格な秩序と自由な空気が調和的に同居する「クララン共同体」について，その仕組み，運営方針，教育理念，秩序維持の方法などを詳細に描き出すことに主眼がおかれる。共同体の統治者であるド・ヴォルマール夫妻を中心に，友人として迎え入れられた元家庭教師やその親友のイギリス貴族エドワード卿（Milord Edouard），そしてジュリの幼なじみの従姉妹クレール・ドルブ（Claire d'Orbe）との間で，時には不自然なまでに長文の書簡がやりとりされる。その書簡の往復と交錯が織りなすポリフォニーの中で，次第に物語の舞台である「クララン共同体」の輪郭が，女主人ジュリ自身の心のありようと重なりつつ読者の眼前に浮かび上がり，そこに命が吹き込まれていくというような作品構造になっている。

本稿ではこの書簡体小説の主要登場人物であるヒロインの元恋人＝元家庭教師の例外性に着目する。第一節においては，元恋人の本名が不明であること，すなわち彼の「名前の不在」を切り口として，元恋人が自らを「例外的存在 exception」としてジュリの両親に提示することで貴族的偏見に疑問を

なげかけ，人間の自然的平等を後ろ盾に身分の壁をも侵犯しようとする過程を分析する。第二節では，第四部書簡 10 で紹介されている「育児室でのおやつ」のエピソードに光を当てる。そして，元家庭教師が本来女性と子供しか入室を許可されない空間へと巧みに侵入し，ジュリたちとともに乳製品を摂取するというエピソードに着目して，男女の壁の侵犯と元家庭教師の「象徴的去勢」について分析する。第三節においては，第五部書簡 2 で紹介されている「アポロンのサロンでの親密な食事」のエピソードに光を当て，人為的な秩序を自然的な秩序に従わせることで，元恋人が本来の魂の高貴さを尺度として「正当に」評価され直し，その「男性性」をも象徴的に取り戻す過程を分析する。

クララン共同体の秩序を称賛しそれに従いつつも，元家庭教師が随所で「例外的待遇」を受けることの作品内部における意味を，具体的な作品分析を通して浮きぼりにしたい。

Ⅰ．名前の不在と身分制度からの逸脱

ジュリの元家庭教師には「名前がない」。第三部書簡 11 に続く短信において，作品中ただ一度だけ「S. G.」という本名の頭文字と見られる本人によるサインがあるものの，それ以外では，この主要登場人物の「本当の」名前が名指されることは，奇妙にも一度もないのである[5]。よく知られているように，彼には「サン＝プルー（Saint-Preux）」という仮名があり，小説の中でもこの仮名に関する言及が幾度かある[6]。サン＝プルーという名が聖なるものと勇敢なるものとを指し示す語を組み合わせた名前であることは，この人物が物語の中で担っている役割の分析においてきわめて重要であると考えられるが[7]，ここではいったんその議論は脇におき，むしろこの匿名の元家庭教師が自らを常に例外的存在として主張していくことの意味に焦点を当て，作品分析を試みたい。

ジュリの元恋人の本当の名前を書簡の中で，あるいは使用人の前では呼ばないということは，ひとつの用心の結果でもあるだろう。だがそのことはまた，貴族と平民という身分の差を社会的に歴然と示す「印」（貴族の名字にはdeが入る）を重視しないことでもある。前述したように，「サン＝プルー」という仮名はこの男の性質と魂の状態を表すものであり，彼の平民としての出自が人間としての資質とは無関係であることをも暗示している[8]。また，やや矛盾するようではあるが，サン＝プルーは「名指されえない者」でもある。つまり彼は，知的な平民の代表あるいは一例であり，極論を言えば，「だれであっても」構わない。この男は貴族の娘ジュリとの身分違いの恋愛という，当時の社会通念的には許されえない関係の中でのみ存在しうる。つまり，ジュリを愛すること，そしてジュリに愛されることを通して「サン＝プルー」と名指される魂は受肉するのであり，この男はそこではじめて，そのアイデンティティを獲得する存在なのである。それゆえ，サン＝プルーは最初から，自らを「例外」として扱うようにジュリの両親に要求する。なぜなら彼は，ジュリに愛される幸運を得た「ただひとりの人間」としてそこで誕生した存在なのであり，当時の貴族社会の一般的慣習の中に収まっている状態では，存在しえなかったはずの人物なのだから。

サン＝プルーの第一の，そして最も大きな要求は「ジュリの教育に対する報酬を与えないこと」である。ジュリに学問を教授する見返りに金銭を授与されることを断固として拒否することで，実際には，あるいは世間的には雇い主であるジュリの両親との間に，もっと言えば貴族と平民の間に，彼は「対等」な友愛関係を築こうとするのである。しかし，この彼の「非常識的」な要求は，もっぱらジュリの母親の寛大さによって許可されたものに過ぎず，ジュリの父親の貴族としての自尊心にはまったく受け入れられないものであった[9]。自らも良家の家庭教師や音楽教師として勤めた経験のある作者ルソーに，金銭のやりとりが人と人との間に主従関係を否応なしに持ち込んでしまうという認識があったことは周知の事実であり[10]，職業としての教師が生活

の為にその報酬を受け取ることの正当性は認めつつも，人間的資質という観点からの自然的平等（同じ魂を持つ存在）を論拠に貴族の娘であるジュリとの「対等な」恋愛関係を望むサン＝プルーとしては，教育に対する報酬を受け取ることは決して応じることの出来ない申し出だったのである。

> わたしがあなたにご教授した報酬をあなたのお父上から受け取り，私の時間の一部，つまり私という人間の一部をお父上に売るということになりましたら，事実上私はあなたのお父上に対してどのような人間になるでしょう。使用人，お父上から給料を頂く男，一種の下僕です。そしてお父上はその信用に対する保証として，私から，使用人の端くれとしての暗黙の忠誠を受け取ることになるでしょう[11]。

上記引用の少し先の箇所に，作者であるルソー自身が注をつけている（出版当初ルソーは，自分はこの書簡集の編者であると述べていたので，この注も編者のものとしての形を取っている）。そこではこの家庭教師の言い分の有効性があっさりと否定され，また，平民の青年を例外的に貴族と同等に扱ったジュリの母親の寛容さについても，結果的には純朴な生娘を堕落させる手助けをしたにすぎないとして，許しがたいものとされている[12]。

若き日の青年サン＝プルーにとって，自らを「例外的存在 exception」と考える内的確信[13]こそが彼自身の存在証明であり，また，身分違いの恋愛への「免罪符」ともなっていたのだが，ルソーの注の中では，共同体の秩序を乱し無垢な生娘を誘惑する行為は，たとえ「自然の秩序」という論拠があったとしても許されえない悪徳として断罪されるのである。ここがルソーのアンビヴァレントなところで，それを悪徳としつつも，美しいものへの押さえがたき熱狂と尊敬の念への彼自身の寛大なまなざしと美化が，この作品には散見される。いずれにせよ，青年は自らを「例外」と見なすことを後ろ盾に，当時の社会慣習から考えればありえない大胆さで，「最大限の敬意を持って」

ジュリの父親に不敬を働く（すなわちその娘を崇拝すると同時に誘惑して「堕落」させ，恋仲になる）ことをもいとわないという矛盾は起こりえたのである。だが，「美しき魂」「徳への愛」といった言葉がその根拠となっていた甘美な絆は，事態を知ったジュリの父親の怒りと，母親の涙と病の末の死という悲劇とともに，切断されてしまうことになる。サン＝プルーに関して言えば，頑なな両親の心を「自然の感情」によって溶かそうというもくろみからとはいえ，両親の許しも得ないままに恋人と密会し，無垢な生娘を誘惑してついに妊娠までさせてしまうのであるから[14]，どんな言葉を使おうとも両親の怒りや悲しみは当然であり，お屋敷からの追放もやむをえないと言えよう[15]。サン＝プルーの前半部における年齢はおよそ20から25歳であり，ジュリはまだ10代後半の設定であった[16]。

このように，そもそも「サン＝プルー」という人物は「掟を破る」ことによって「誕生」し，また，彼の「誕生」によって物語は開始し，展開していく。この（元）家庭教師の大胆な行為は他方において，偏見にとらわれがんじがらめになった当時の貴族社会の慣習に対し，それを批判すると同時に自然の秩序の優位と尊さを説くという重要な役割をも担っている。そして，物語の後半部においては，この既存社会の規範とは相容れない「自然の秩序」を，「自然の意図にかなった人為的秩序」の中で「飼いならし」「調和させ」ていく作業が試みられることになる。

Ⅱ．象徴的去勢：「男女の壁」の侵犯

さて，ジュリの結婚後，傷心の末にエドワード卿につれられて4年近く従事した世界周航の任務を終え，ド・ヴォルマール夫妻によってクララン共同体に迎え入れられたサン＝プルーであるが，そこで彼は例外的に，平民でありながら貴族同様の待遇（友愛の関係）を受ける。だがここでは，サン＝プルーの「掟の侵犯」は身分の壁にとどまらない。彼が親友エドワード卿に宛

てた第四部書簡 10 の中で，クララン共同体における男女の空間的分離に関する大原則とその意図および効用についてが，かなり詳細な描写とともに語られている。そしてこの書簡において，小説の中でもっとも大きな「掟破り」のエピソードのひとつが報告されているのである。それは，男子禁制の空間へのサン＝プルーの「侵入」による，「男女の壁」の侵犯である。

> 毎週日曜日，夕方の説教が済みますと，女たちはもう一度，奥様［ジュリ］のご同意を得て順番に招いた親類の女性や女友だちなどを伴って育児室に集まります。そこで，奥様の下さるちょっとしたご馳走が出るまで，話をしたり，歌を唱ったり，追羽子とか棒抜きとか，そのほか何か子供たちが見て喜びそうな手先の器用さを競う遊びを，子供たち自身で楽しんで出来るようになるまで行います。おやつが出されます。それはいくつかの乳製品や捺し焼菓子，茹で菓子，メルヴェーユ，そのほか女子供の好きな食べものです。葡萄酒は常にメニューからは外されておりますし，この小さな女子部屋に男性が入ることはほとんどなく，間食に男性が加わることは決してありません。ジュリさんが出席されないことは極くまれです。今までのところ特権的扱いを受けたのはわたし［サン＝プルー］一人です。この前の日曜，わたしは強引にお願いして，彼女［ジュリ］と一緒にそこへ行くことを許されたのです。彼女はこの恩恵の価値をわたしに有り難がらせることに非常な注意を払いました。彼女は声を大きくして，今回一度だけは許可しますけれど，これは主であるド・ヴォルマール氏ご自身にさえお許ししなかったことなのですよ，と仰りました[17]。

「葡萄酒は常にメニューからは外されております」とわざわざ明記されていることは，見落とせないディテールである。なぜなら，このサン＝プルーの特別扱いについては，彼が以前ジュリに対して禁酒の誓いを立てたことが

深く関連していると考えられるためである。かつてパリ訪問の際に深酒によって理性を失い，意識の曖昧な中で娼婦と一夜をともにしてしまう失敗をした経験を持つサン＝プルーは，激しい後悔と自責の念にかられて好きな葡萄酒を一生絶つ決意をしている。この誓いはのちにジュリ自身によって緩和するよう命じられるのではあるが，これは一種のサン＝プルーの「象徴的去勢」のエピソードと解釈することが出来る。この「象徴的去勢」が前提となっているからこそ，サン＝プルーは女性と子供のみが入れる育児室への入室を，主人のド・ヴォルマール氏を差し置いて例外的に許可されるのである。元家庭教師の「象徴的去勢」を表すエピソードは，小説を通して何度か変奏されるのであるが，このエピソードはその中でも決定的なものといえよう。

*

次の引用に見られるように，元家庭教師は「観察者」として育児室の様子の報告を行うように見えながら，実際はあえて女性の間に混じり，彼女たちが好む乳製品をおなかいっぱいに摂取する[18]。

> 実においしい délicieux おやつを頂きました。この土地の乳製品に比べられるような食べものが世界の何処にあるというのでしょう。ジュリさんが指導しておられる酪農所の乳製品を，ジュリさんのおそばで食べるのですから，どんなにおいしいかお察しください[19]。

乳製品はこの書簡の中でも「女子供の好むもの」の筆頭にあげられているが，下線部に注目すると，このくだりは明らかにジュリによるサン＝プルーへの「授乳」のメタファーとなっている[20]。「象徴的去勢」によってジュリを情念の対象とすることを断念したサン＝プルーは，今度はジュリと同化する方向にその情念の昇華方法を転換する。彼女を対象化できないほどに彼女に同化することで，サン＝プルーは叶うことのない恋愛の苦しみから逃れ，あたかも母の胎内へと戻っていくかのようなそぶりを見せるのである。

ところで，次の引用によると，葡萄酒は男性が好む象徴的な食品とされている。そして，アルコールが，その摂取によって肉体的にも精神的にも男性性を強化するものとして，サン＝プルーによって認識されていることがわかる。

乳製品とお砂糖は女性の生来の嗜好品の一つで，いわば無邪気と優しみとのシンボルでして，この二つは女性の最も愛すべき飾りです。これに反して男性は一般に強烈な味とアルコール性の飲み物を求めますが，こういう食物は自然が男性に要求する活発で勤労的な生活を営むのに一層よく適しています。こうした性別によって異なった嗜好が変性し，混同されるにいたることは，ほぼ間違いなく両性が無秩序に混淆していることの徴なのです。事実，女性が絶えず男性と同じ空間で生活しているフランスにおいては，女性は乳製品に対する嗜好をまったく失い，また男性は葡萄酒に対する嗜好を甚だ失なってしまったことをわたしは認めました。けれども両性の混合が比較的少ないイギリスでは，男女の固有の嗜好が比較的によく保存されていることをわたしは認めました。一般的に言って，どのような食べものを好むかということが，しばしばその人の性格のなんらかの特徴を表しうるとわたしは考えています。野菜を沢山食べているイタリア人は女性的な性質で柔弱です。肉類を大いに食べるあなた方イギリス人の不屈の徳性の中には，何かしら強情で，野蛮に類するところがあります。生来冷静で，温和で，素朴ですが，怒ると猛烈で，激昂するスイス人はどちらの食物をも好み，乳製品も飲めば葡萄酒も飲みます。柔軟で変化し易いフランス人はあらゆる料理を食べ，あらゆる性質に順応します。ジュリさんご自身がわたくしにとって一つの例になり得るでしょう。と言いますのは，彼女は食事については美味しい物好き sensuelle で，また食いしん坊 gourmande でいらっしゃるのですが，肉も，強い薬味も，塩も好まれず，また生の葡萄酒をお飲みに

なったことは一度もありません。極上の野菜，卵，クリーム，果物というのが彼女の常食でして［...］[21]

「どちらの食物も食べる」スイス人は，その独特の食習慣によって近隣諸国民に比べると「中性的」な性質を持つことになるという傾向が説明され[22]，そしてまた，葡萄酒を断つことで男性としては「無力化」したサン＝プルーが，ウォッカなどの強い酒を飲むことで有名なロシアの出身であるド・ヴォルマール氏とは別の意味での「特別扱い」を受けることが可能となることの根拠がここに示される。つまり，もはや「去勢」せずにはジュリのそばにはいられなくなった元恋人は，その立場を逆手に取って，家の主人にさえ入ることが許されていない女子供ばかりの育児室へ強引に侵入する。そして女性たちとともに食卓につき，女性が好きな食べものをともに食べ，それを自らの身体の一部とするのである。これは，元恋人の身体的側面からの「女性化」（ジュリとの同化），そして「乳児化」（ジュリからの「授乳」あるいはジュリの胎内に入る）の象徴的儀式であり，また彼の欲望の歪んだ形での表れでもあるだろう[23]。つまり当然のことながら，自らの存在根拠であるジュリの胎内に戻りたいという彼の願望は必ずしも無垢なものではない。この願望が同時に男性として彼女を求める欲求（ジュリの「体内」に入る）をも秘めているということは非常に重要で，留意すべき点である。

「あなた［サン＝プルー］は何処ででも沢山召し上がって，女ばかりの会食にお加わりになってもヴァレー人たちの会食にお加わりになったときに劣らないくらい見事なお手際をお示しになるということが分かります」と［ジュリさんが］言われましたので，わたしは，「それで罰を受けることもあの時と変わりません。この場合もあの場合と同じように酔うことが時折あるのでして，理性は酒庫で乱れるのとまったく同じように酪農小屋（シャレー）でも乱れることがあり得るのです」と申しまし

た。彼女は眼を伏せられて，それにはお答えにならず，顔を赤くなさって子供たちを愛撫なさり始めました[24]。

酪農小屋（シャレー）は，かつて恋人同士だった二人が，ジュリの両親の留守中に秘密の逢瀬を計画した場所である[25]。つまり，乳製品が作られる場所である酪農小屋（シャレー）は，同時に愛と欲望のメタファーとなっているのである。葡萄酒を断って乳製品を摂取することで象徴的に「去勢」し，自らの男性的な性質と所有の欲望を，女性的な無垢な嗜好，あるいは母親の乳を求める無垢な乳児の欲求へと「浄化」したかに見えるサン＝プルーのアンビヴァレンスが，ここにおいても見て取れるといえよう[26]。

Ⅲ．アポロンのサロン：友情の可能性と男性性の「回復」

前節では，女性と子供のみの空間に「象徴的去勢」をしたサン＝プルーが侵入する場面について，元家庭教師の男性的な欲求の飼いならしと浄化の過程，およびそのアンビヴァレンスという観点からの分析をおこなった。

次に我々は，真に親密な関係にある人間のみが参加を許される特別な食卓である「アポロンのサロン」に，元家庭教師が招かれるまでのエピソードに着目したい。サン＝プルーは，エドワード卿に宛てた第五部書簡２において，アポロンのサロンのことを次のように描写している。

いつも食事をする一階の食堂とは別に，小さな食堂が二階にあります。この特別の食堂は角部屋になっていて，両側の窓から光が入ります。一方の窓は庭園にのぞみ，木々の間隠れの向う側に湖が見えます。他方の側からは大きな丘のような葡萄畑がその豊かな富を眼前に繰り広げ始めており，二ヶ月後にその収穫の時を控えています。この部屋は狭いのですが，そこを快く笑い溢れる場とするためのあらゆるもので飾られてい

ます。[...] ド・ヴォルマール氏は冗談に，そこをアポロンのサロンと呼んでおられます[27]。

これまでのエピソードとは違い，ここでは，秩序は「犯される」のではない。むしろ，サン＝プルーはクラランの秩序に「取り込まれる」ことによってド・ヴォルマール夫人の友愛と信頼を勝ち得，このサロン（食堂）へ招かれるのである。アポロンのサロンへは，もっとも親密 intime な関係の者だけが入ることを許されている。

単なるお客はそこに入れられず，他人 étrangers がいる時は決してそこで食事をしません。そこは信頼，友情，自由が身を寄せる，犯すべからざる隠れ家です。この場所で食卓の交わりを結び合わせるものは心の交わり société des cœurs です。そこは親密な関係となるためのいわばイニシエーションの場でして，もう決して離れまいと思う人々以外とは決してそこに集まりません [...]。わたし［サン＝プルー］は同様の名誉を初めからは受けませんでした。ドルブ夫人［クレール］のところから帰って来た時にやっとアポロンのサロンで待遇されたのです。[...] わたしはまだ経験したことのなかった親密さ，快楽，和合，気楽さの入り交じった甘美な気持ちをそこに見出したのです。人から言われなくとも気持ちが一層自由になり，以前よりも一層よくお互いに理解しあうようになったと思いました。使用人たちを遠ざけたことで，わたしはもはや心の底に遠慮を持たなくなりました[28]。

このような親密な食事の場への招待こそが，サン＝プルーにとってはジュリとその夫からの身分を超えた，否，むしろ身分的な差異を捨象した自然の秩序への敬意の表れとして感動をさそい，物語の前半部でおとしめられたその自尊心を救済し，満足させるものだったと言える[29]。

単純化と誤解を恐れずに言えば，このアポロンのサロンにおいては，いわば tutoyer と vouvoyer の心理的距離と同じ論理が第一フィルターとして働いている。両者はフランス語独特の二人称を対象とした表現である。対象が単数である場合，前者は心理的距離の近しい関係の相手に用いられ，後者はある程度の距離感のある相手に敬意を持って用いられる。サン＝プルーは，ジュリとの恋愛前は彼女に vouvoyer の表現を，恋人同士であった間は tutoyer の表現を使用している。そしてのちに彼女が人妻となると，再び vouvoyer を用いるのである[30]。ところで，このアポロンのサロンに同席を許されるかどうかを選別するフィルターとなるのは，「身分」ではなく「友愛」であり，その友愛の条件となるのが，徳を愛するという魂の高貴さと，人間を愛するという魂の同質性である。どんなに立派な称号を持った王侯貴族であろうとも，クラランでの簡素で親密な食卓への同席の栄誉は与えられるものではない。むしろ，単なる客であり「他人 étrangers」である彼らには，豪華で仰々しい，すなわち形式的で他人行儀な「おもてなし」の席が準備されるだろう。それはつまり，貴族社会の慣習にとらわれた人々の価値観が，まさにそのような仰々しさと豪華さを敬意と歓待の基準としているからなのである。ド・ヴォルマール夫妻は，真の豊かさと，親密さの邪魔をしないおもてなしを知る，よき趣味 bon goût の持ち主にのみ，このアポロンのサロンへのパスポートを提供する。それには基本的に，現実社会において偶然的に与えられている地位や身分とは無関係に，自然的な秩序（すなわち語の純粋な意味で「人間であること」）を好む感性を持ち合わせているかどうか，が判断基準とされるのである。

つまり，アポロンのサロンに同席を許可される名誉を与えられるのは，社会的な立場とは基本的に無関係な選択基準によって選ばれた人間だということになる。ただし，いわゆる貴族的価値観を体現しすぎている人間や，使用人としてクララン共同体の統治者と主従関係にある人間には，彼らがジュリ達とどんなに親密な関係であっても，その名誉を与えられることはほとんど

ない（例外としてはジュリの父親があげられる）。社会的立場を意識せずにいられ，またその社会的立場にもかかわらずよき趣味 goût を持ち続けていられる人間だけが，そこへの同席を許可されるのである。

ここにおいてサン＝プルーはやはりひとつの例外的な立場にいる。それはあたかも，作者ルソーの奉公先であったグーヴォン家において，身分的には貴族であった招待客が誤読したラテン語碑文の意味を，当時は下僕の地位にしかなかった平民のジャン＝ジャックが見事に読み解き，館の主からも令嬢からも尊敬のまなざしを受けたという若き日の思い出が再現されているかのようである。身分違いの結婚という，家柄や相続の問題が発生する場面においては，貴族的な偏見と価値観にとらわれたジュリの父デタンジュ氏に「身の程知らずの恩知らず者」として追放されることになった元家庭教師であるが，アポロンのサロンでの共食の場面においては，今度は友愛の名の下に，デタンジュ氏の愛娘ジュリとその夫であるド・ヴォルマール氏によって，彼はいわば象徴的にその名誉を回復するのである。

*

さて，あまり注目されていない点だが，身分的な壁が象徴的に取り除かれるのと同時に，アポロンのサロンではもうひとつ重大な「儀式」が行われている。以下の引用を見てみよう。

> そして，ジュリさんのご懇請によって，食事の終わりにご主人夫妻と生の葡萄酒を飲むという，あれほど長い年月すてていた習慣を［サン＝プルーが］取り戻したのはその時でした[31]。

葡萄酒の解禁が，サン＝プルーの男性的欲望の形を変えた「解禁」でもあったことは言うまでもない。しかもそれは「ジュリの懇請」によって行われたというのである。驚くべきことに，ジュリとド・ヴォルマール氏によって見事なまでに「去勢」され，クララン共同体の秩序の中で自らの欲望を飼いな

らし，昇華するよう導かれてきたサン＝プルーは，このサロンでの親密な食卓の場で，ド・ヴォルマール夫妻の立ち会いと導きのもと，その男性性の象徴的な回復を許可されるのである。引用部分の直後に「この晩餐はわたしを歓喜させました m'enchanta」といったサン＝プルー自らの告白があることも，彼の隠された欲望を暗示しており非常に示唆的である[32]。

結びに代えて

作田啓一氏は，ルソーの2回の自己革命を，それぞれ「父への回帰」，「母への回帰」と象徴的に定義付け，ルソーがある時期から，対象の所有ではなく，対象への同化を求める傾向を顕著にしている点に着目している[33]。よく知られているように，ルソー自身も，対象への同化を試みることで「私」と「あなた」の境界線を曖昧化し，限りなく透明な関係を築こうとしているとスタロバンスキーも指摘している[34]。

本稿では，元恋人＝元家庭教師の「例外的性質」を根拠とした「例外的扱い」の要求が，物語を開始させ，展開していくという視点から作品の分析を試みた。第一節では，平民である（元）家庭教師が貴族の娘と恋仲になり結婚をも夢見るという，当時の社会のルールからは著しく逸脱した「例外的扱い」を要求するエピソードの分析を通して，自然の秩序と貴族主義的偏見に満たされた人為的秩序を対置させ，前者の優位を説こうとするルソー的論理を提示した。第二節においては，厳格なルールのもとで運営がなされているクララン共同体において，元恋人＝元家庭教師が自らの「象徴的去勢」を盾に，女性と子供のみの空間である育児室へと侵入し，「男女の壁の侵犯」を試みるエピソードを分析した。そして，彼が「侵入」し乳製品を摂取する行為が，去勢と「女性化」のメタファーであると同時に，ジュリの胎内へと戻る乳児化のメタファーでもあること，そして，それがさらにまた，ジュリの「体内」への侵入を欲望する男性性をもかいま見させているというアンビヴァ

レンスを指摘した。第三節においては，親密な食事の間であるアポロンのサロンに元家庭教師が招待されたエピソードを分析した。そして，身分の高貴さではなく魂の高貴さによって同席を許されるこのアポロンのサロンでの親密な共食によって，既存の社会においては平民であることによって不当におとしめられていた元家庭教師への「償い」が象徴的に完了したことを示した。

このように，サン＝プルーは物語が進行するにつれ，次第にクララン共同体の内部に心身ともに深く包摂されていくように見える。にもかかわらず，彼は同時に一貫して徹底的にクララランの中で「例外的」な存在であり続ける。彼はいわば最初から最後まで「掟の外にある者」としてふるまう存在であり，そこに彼の存在意義があり，また物語の原動力があるという矛盾を，小説『新エロイーズ』は内包し続ける。それは，彼が結局は最後までジュリを愛し欲望し続けるからであり，また，ジュリから愛され欲望され続けたからでもある。消えることのない愛情と欲望，そしてそれを昇華する努力との緊張関係の中で，物語は紡ぎだされる。しかしこの危うい均衡が崩れ去るとき，物語も共同体も，共に崩壊し終焉する運命が待ち受けているのである。ここで我々は，サン＝プルー以外の人物に光をあててこの書簡体小説を読み解く必要性と興味にかられるが，それはまたの機会への課題としたい[35]。

（付記：本稿は，平成21-22年度科学研究費補助金「研究活動スタート支援」（課題番号21820047）の受給をうけて実現した研究成果の一部である。）

《注》

1）　鳴子博子『ルソーにおける正義と歴史：ユートピアなき永久民主主義革命論』（中央大学出版会，2001），川合清隆『ルソーとジュネーヴ共和国：人民主権論の成立』（名古屋大学出版会，2007）など参照。フランス語で読める古典的研究書として，Michel Launay, *Jean-Jacques Rousseau, écrivain politique : 1712-1762*（Cannes et Grenoble, CEL et ACER, 1972）など。

2）『新エロイーズ』の作品紹介については，井上櫻子「『新エロイーズ』――パトスの解放を志向する「貞淑な」女性の物語――」（『ルソーを学ぶひとのために』桑瀬章二郎編，第五章，世界思想社，2010，pp. 94-116）が，最新の受容論をふ

まえた秀逸なものとなっている。フランス語文献では Yannick SÉITÉ, *Du livre au lire* : La Nouvelle Héloïse : *roman des lumières* (Honoré Champion, 2002) などが精緻な研究書としてあげられる。その他，*Études Jean-Jacques Rousseau*, n° 5, « La Nouvelle Héloïse *aujourd'hui* » (Reims, À l'Écart, 1991) や *Annales de la société J.-J. Rousseau : L'amour dans* "La Nouvelle Héloïse" (t. 44, Genève, droz, 2002) などにも秀逸な論文が多数収められている。

3) ナポレオンが『新エロイーズ』の愛読者だったことについては，例えば F. G. Healey, « Napoléon et la "*Nouvelle Héloïse*" », dans *Rousseau et Napoléon*, Paris et Genève, Droz et Minard, 1957, chap. V, pp. 59-71 参照。

4) 前半部に関しては，第一部では書簡 65 通と短信 5 通のうち（元）家庭教師からジュリ宛が 29 通，ジュリから（元）家庭教師宛が 27 通，第二部では書簡 28 通と断簡・短信 2 通のうち，元家庭教師からジュリ宛が 12 通，ジュリから元家庭教師宛が 8 通，第三部では書簡 26 通と短信 2 通のうち元家庭教師からジュリ宛が 2 通，ジュリから元家庭教師宛が 6 通である。それに対して後半部では，第四部と第五部においては両者間で書簡は一通も交わされず，第六部では書簡 13 通のうち，ジュリから元家庭教師へ 3 通（しかも最初の 2 通は「ド・ヴォルマール夫人」が差出人となっている），元家庭教師からジュリへ 1 通のみとなっている。この最後の書簡（第六部書簡 7）により，ジュリと元家庭教師の文通が約 7 年間途絶えていたことがわかる。

5) もっともこの作品の中で，「本当の名前」が名指されることのない人物は元家庭教師に限ったことではない。主要登場人物の中では，例えばド・ヴォルマール氏でさえジュリの父に出会う前に名前を変えていたことが明かされるし（しかも彼のファーストネームは作品中一度も言及されることはない。ド・ヴォルマール氏は家の主の象徴として，その登場から最後まで，一貫して Monsieur de Wolmar と呼ばれるのである），ジュリの二人の息子のうち，クレールの娘アンリエット Henriette の婿候補とされる弟にはマルセラン Marcellin という名がつけられているにもかかわらず，長男の方は「兄」とされるばかりである。さらに，ジュリには早くに亡くなった兄がいたことになっているが，この兄の名も不明である。

6) 『新エロイーズ』第三部書簡 14，第四部書簡 5 参照。

7) « Saint » は聖性を，« Preux » は騎士道的な勇敢さを表す。

8) サン＝プルーが優れた人間的資質を備えていることについては，『新エロイーズ』第一部書簡 62 の中で，イギリスの大貴族で彼の親友のエドワード卿が行っている彼の弁護を参照。なお，この書簡の中で卿は，元家庭教師の父親（平民）が「祖国のために無報酬で武器を担った」気高い人物であることを示し，「外国の君主の為に軍務に精励して手厚い報酬を受けた」ジュリの父親（貴族）と，その名誉 honneur について比較している（*NH*, première partie, lettre LXII, *OC*,

II, pp. 169-179)。*NH* : *Julie ou la Nouvelle Héloïse*; *OC* : *Œuvres Complètes de Jean-Jacques Rousseau,* édition publiée sous la direction de B. Gagnebin et M. Raymond, 5 volumes, coll. Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1959-1995. ルソーの著作からの引用については特に記載がない限りプレイアード版全集からのものである。翻訳については岩波文庫版を主に参照したが，引用者が表現を変更した箇所もある。また，特に指摘のない限り，引用文中の下線による強調，省略，［　］による内容説明の追加は引用者によるものである。

9）「父はあなた［サン＝プルー］が貴族でらっしゃらないことをお知りになりますと，あなたに月々いくら差し上げているかとお尋ねになりました。母が口をおききになって，そのような取り決めは申し出る事さえできませんこと［...］つねにあなたはすべてお退けになったことを申し上げました。ところがこの自尊のご態度は父の自尊心を刺激しただけでした。平民に対して負債があるという思いに耐えられようかというわけなのです」*NH,* première partie, lettre XXII, *OC,* II, p. 75. 佐藤淳二氏は，18 世紀当時は「身分違いの恋愛が生命の危険さえ孕んでいた」と指摘している。佐藤淳二「研究ノート：『新エロイーズ』第二部における肖像画の意味」『仏語仏文学研究』第 15 号（東京大学仏語仏文学研究会，1997, p. 252)。

10）ルソーと金銭の問題に関しては，拙論，折方のぞみ「ルソーの幸福論素描――彼岸と此岸の狭間で」『人文科学論集』第 56 号（明治大学経営学部人文科学研究室編，2010，pp. 49-74）の「結びに代えて」を参照。

11）*NH,* première partie, lettre XXIV, *OC,* II, p. 85.『告白』の記述によると，作者であるルソー自身，オペラ『村の占者』の御前上演が大成功をおさめ，国王謁見の機会を与えられた折，それが「年金の申し出」である可能性が高かったにもかかわらず，理由をつけて謁見を辞退した経緯がある。そのことをディドロらから批判されると，自らの主義思想に背いて権力におもねるような言説を生産しなければならなくなる可能性を危惧してのことであると返答している。当時はまだ職業文人として生計を立てることはほとんど不可能な世の中で，文人は大抵パトロンをつけて執筆活動を行っていた。また，一世代上のヴォルテールなどは，王侯貴族をパトロンにつけてその啓蒙活動に従事することこそが思想家の使命だと考えていた。

12）*Ibid.*

13）この，自らを他とは絶対的に異質な存在と認識する「内的確信」はルソー自身も『告白』の冒頭部に記している。「わたし［ルソー］は自分が見てきた他の誰とも同じようにはつくられていない。わたしはこの世に存在する誰とも同じようには作られていないとあえて信じている」*Les confessions, OC,* I, p. 5. ルソーは『告白』において，自らを堕落した人為的社会の内部の膿みを照らし出すための自然の申し子と位置づけることで「自然と人為」の両義的関係を描き出すことに

見事に成功している。

14）その後，二人の関係を知った父親のデタンジュ氏の折檻により，ジュリは結果的に流産する。『新エロイーズ』第一部書簡 63 とその追伸，および第一部書簡 65 参照。

15）貴族の令嬢を誘惑した罪により，原初の幸福な世界である「エデンの園」（＝お屋敷）から「使用人」である主人公の男性が追放されるエピソードの「型」は，『新エロイーズ』のみならず，ヴォルテールの代表的なコント作品『カンディード』でもパロディ化された形で採用されている。

16）「これは二十歳にしては珍しく多くの事を知っている賢人だと思う」*NH,* première partie, lettre XXII, note, *OC,* II, p. 74.「あなたは二十一歳の時にヴァレーから真面目で思慮深い話を書き送ってくださいましたが，二十五の時には［...］」*NH,* seconde partie, lettre XXVII, *OC,* II, p. 302.

17）*NH,* quatrième partie, lettre X, *OC,* II, pp. 451-452.

18）「ファンションはわたしに，クリーム入り凝乳や，クリーム抜き凝乳，そして押し焼菓子や香辛菓子を下さいました。どれもこれも，たちまち消えてなくなりました。ジュリさんは私の食欲旺盛さを笑いました。［...］もう一皿クリームをくださって［...］」*Ibid.,* p. 452.

19）*Ibid.* この引用部分のあと，上の注にある通り，ジュリがサン＝プルーの「食欲旺盛さ appétit」を笑ったという記述が続く。délicieux という語はもちろんのこと，ベルナール＝ギュイヨンも指摘しているように，この appétit という語が性欲のメタファーでもあることは言うまでもない（*Ibid.,* note 1, p. 1602）。

20）注 26 参照。cf. ジャン＝ジャックに「ママン maman」「プチ petit」と呼び合う関係にあった 9 歳年上の美しき未亡人，ヴァランス夫人（Madame de Warens）という存在がいたことは有名な事実である。『告白』によると，若き日のジャン＝ジャックは彼女の庇護の下で，子供の頃味わえなかった母親からの愛情を代替的に享受しようとするが（ルソーの実母は彼の誕生後ほどなく産褥熱により亡くなっている），結局は夫人の導きによって二人は「男女の関係」となる。だがジャン＝ジャック自身はその事実をうまく消化できず，「ママン」を所有の対象として認識することに大きな困難と苦痛を覚え，近親相姦を犯したような苦悩に襲われている。

21）*NH,* quatrième partie, lettre X, *OC,* II, pp. 452-453. sensuelle や gourmande といった語がジュリの抑圧された欲望のコノテーションであることは言うまでもない。ジュリの抑圧された欲望のテーマについては例えば次の論文を参照。Georges Benrekassa, « Le désir d'Héloïse », dans *Éclectisme et Cohérences des Lumières,* Paris, Nizet, 1992, pp. 55-67.

22）これはモンテスキューに代表される「クリマ（気候）」による国民性の違いといった論とも対をなす言説である。乳母が一般的であった当時，母親に授乳を促

すために，「乳母の悪い乳を飲むことによる乳児への弊害」などといった言説もあった（『エミール』第一編）。また，ブリア＝サヴァランに代表されるように，当時の王侯貴族社会は快楽と美食を是としており，植民地拡大もあいまって，遠くからの新しいもの，珍しいものへの興味と需要が急速に高まった時代でもあった。当時のこうした風潮は，例えばヴィヴァン＝ドゥノンの *Point de lendemain*（翌日はない）や，バスティッドの *La petite maison*（小さな館）といったリベルタン小説を読むことでもかいま見ることが出来る。18 世紀後半のフランス社会・文学・思想におけるリベルティナージュについては，ドゥロンの次の著書が詳しい。Michel Delon, *Le savoir-vivre libertin,* Paris, Hachette, coll. Pluriel, juin 2004. cf. 邦訳で読める一次文献としては例えば次のものがある。『幸福の味わい ── 食べることと愛すること』ジャンティ・ベルナール著・ムノン著，中川久定・村上陽一郎編，戸部松実訳，十八世紀叢書Ⅲ，国書刊行会，1997（同書には，ジャンティ・ベルナールの『恋の手ほどき』とムノンの『町人の食卓』，そして『百科全書』から「料理術」と「男女の愛」の項目の邦訳が収められている）。

23）作田啓一氏によると，ルソーは二回の「自己革命」において父および母への回帰の実現を志向しているが，母への回帰は同時に精神分析でいうところの「口唇期への退行」（生後まもなくの実母の死によって強制的に奪われた，乳幼児時代の母とのふれあいを代替的に取り戻そうとする行為）でもあると指摘している（作田啓一『増補　ルソー。市民と個人』，筑摩書房，1992）。また，シャランドは，『アベラールとエロイーズ』の「男と女」および「メンターと生徒」の役割が，『新エロイーズ』のサン＝プルーとジュリにおいては逆転しているという興味深い指摘をしている。Laure Challandes, « D'Abélard à Julie : un héritage renversé », *Annales de la société J.-J. Rousseau : L'amour dans* "La Nouvelle Héloïse", t. 44, Genève, droz, 2002, pp. 55–80.

24）*NH,* quatrième partie, lettre X, *OC,* II, p. 452. ヴァレーに関するくだりについては，『新エロイーズ』第一部書簡 23 参照。この書簡には，ヴァレーに滞在したサン＝プルーからの報告が記されており，ヴァレー人が大いなる酒飲みで，その土地の葡萄酒が非常に強いものであること，そしてヴァレーの女性が自然で美しい容貌を兼ね備えていること等が紹介されている。

25）結局は様々な状況的事情によりこの計画は実現しない。酪農小屋（シャレー）をめぐるエピソードについては，『新エロイーズ』第一部書簡 36 から書簡 45 までを参照。「[...] 数軒の酪農小屋（シャレー）が散在しておりまして，その藁葺屋根の下では，田舎の素朴さの友である愛と喜びが隠れることが出来るのです。みずみずしく慎み深い牛乳売りの女達は，自分たちの秘密を守る必要性から，他人の秘密をも守ることを心得た人たちです」*NH,* première partie, lettre XXXVI, *OC,* II, pp. 112–113;「貴女がなんと仰ろうと，酪農小屋（シャレー）の方がずっとよかったのですから」*Ibid.,* lettre XLV, p. 126.

26）有名な「恩寵」として，サン＝プルーがジュリの管理する果樹園「エリゼ」に入ることを許されるエピソードがある。ここで彼は「すべてがジュリによって作られた」空間へ，明らかにエロティックな欲望の幻想を抱いて「侵入」していた。その欲望はたちまちにして「浄化」されてしまうのではあるが，下記の表現と引用19の表現の類似は偶然ではないだろう。「なるほどすべては自然がしたことですけれど，すべては私［ジュリ］の指導のもとに行われたことで，私が指示しなかったことは何もありませんわ」*NH,* quatrième partie, lettre XI, *OC,* II, p. 472;「私［サン＝プルー］が目にするもので，彼女の手に触れていないものは何もないでしょう」*Ibid.,* p. 486. 第四部書簡11において，サン＝プルーはジュリに果樹園の鍵を渡されるが，これはジュリ自身の鍵であった。ジュリの「体内」への侵入を試みた元恋人は，そこで「いまにも調理されそうになっていた瀕死の魚」が水路に戻されて生き延びている様を見る。この魚は彼自身のメタファーであり，水路がジュリの愛情だとすると，彼は，自らの存在を保証してくれるジュリの「胎内」すなわち子宮内の羊水の中に，ここで象徴的に戻ったのだとも言える。井上櫻子氏は『新エロイーズ』における「水」や「湖」をジュリの欲望のメタファーであるとしているが，我々はより広義に考え，それらを「愛情」のメタファーであると解釈している。井上櫻子，「『新エロイーズ』における欲望と規律（2）――ルソーにおける「自然」の両義性の問題を中心に――」『慶應義塾大学日吉紀要』48号，慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会，2009，pp. 1-19（特にp. 5参照）。

27）*NH,* cinquième partie, lettre II, *OC,* II, pp. 543-544.

28）*Ibid.,* p. 544.

29）井上櫻子氏によると，このアポロンのサロンは自然の欲望と人為的秩序のちょうど中間に位置する微妙な場所（ジュリの性的欲望を象徴する「湖」と家庭の秩序を象徴する「葡萄畑」）に位置しており，それはまた両者の間で揺れるジュリの心情そのもののメタファーでもあるという。井上櫻子，前掲論文，p. 16-17.

30）第一部書簡4（ジュリからサン＝プルーへの愛の告白の手紙）を境に，突然二人のやりとりはvouvoyerからtutoyerへと変化する。他方，ジュリ結婚数年後と舞台が変わった第四部書簡4のジュリからサン＝プルーへの短信では，サン＝プルーに対して« venez »（いらして下さい）とvouvoyerが使われているほか，サン＝プルーからエドワード卿に宛てた同じ第四部の書簡6の中でも，ジュリとサン＝プルーが互いにvouvoyerしている様子が描写されている。

31）*NH,* cinquième partie, lettre II, *OC,* II, p. 544.

32）『告白』の中でルソーは，奉公先のマブリ家で，管理を任された酒蔵で主人に隠れて葡萄酒をくすね小説を読みながら飲んでいたという盗みの罪を，その時味わった快楽と共に告白している。飲酒が理性を惑わせるものであり，飲酒による快楽が男性的な欲望のメタファーであると考えると，夫妻の面前での彼の飲酒はむしろ，その男性的欲望を夫妻の視線の管理下に置き，徹底的に骨抜きにする作

業であったとも解釈できる。だが，結局サン＝プルーの欲望も，そしてジュリ自身の欲望も，排除することも鎮火することも不可能なものであることが最終的に露呈することを鑑みると，たとえそのように解釈したとしても，前述の試みが不成功に終わったことは明らかである。しかもこのような解釈では，この一節に続くサン＝プルーの「歓喜」を説明しきれない。

33）作田啓一，前掲書。

34）Jean Starobinski, *Jean-Jacques Rousseau : la transparence et l'obstacle, suivi de sept essais sur Rousseau,* gallimard, 1971.

35）次の拙論の中で，女性登場人物であるジュリとクレールに光を当てた『新エロイーズ』の作品分析を行ったことがある。Nozomi INOUE, « L'image de l'héroïsme féminin chez J.-J. Rousseau : au-dela de la "maternite" »（ルソーの女性像：ヒロイズムの観点からの一考察 ──「母性」を越えて ──），『年報地域文化研究』第５号（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻，pp. 53-103）。

（おりかた・のぞみ　経営学部専任講師）